小さな庭から希望の調べを奏でる人

田中作子歌集『小庭（さにわ）の四季』に寄せて

鈴木比佐雄

1

田中作子さんは、戦前から詩を書かれ、二〇一一年に刊行した『吉野夕景』を含めて五冊の詩集を既に刊行している詩人だ。しかし数年前から小川とよ子氏主宰の短歌サークルに参加することを勧められて短歌を書き始めたという。「小庭」を「さにわ」と呼び爽やかな響きを残すこの歌集原稿を拝読し、私の中で感じていた短歌の抒情的な韻律とは異なる魅力を感じた。それは何か見知らぬ路地裏に入り込み、その近くの露地の小庭（さにわ）から不思議な韻律の世界に紛れ込んでいき、短歌でありながらも長編叙事詩を読む体験をするかのようだった。一首の短歌の調べが次の短歌に転移して、その大らかな短歌の調べの重なりに転調して、いつしかビバルディの協奏曲『四季』に引き込まれてしまうように最後まで通読してしまった。同じ五七五七七の調べでもこ

のような単独性を貫きながら、万葉の千数百年以上前の民衆の心情が込められた短歌の調べと重なってくる思いがしたのだった。

敗戦後に小野十三郎は『詩論』の中で詩の中に潜む「短歌的抒情」を「奴隷の韻律」といい、詩の中に詩人独自の韻律が詩人内部の批評性から生み出されることを提唱し、「短歌的抒情の否定」を主張した。この小野十三郎の詩論は、多くの詩人たちが七五調などの文語詩で天皇を守るために、戦争に向かうような詩を書いてしまった詩人の戦争責任を内部に問う意味で、歴史的にも重要な評論であり詩論であった。しかし小野十三郎の詩論は、もちろん短歌の存在や短歌を作ることを否定したわけではない。「短歌的抒情」の韻律に呑み込まれて詩人の主体性を消し去らないように、小野十三郎は自らの内部から湧き出てくる真の批評的な韻律を生み出すように、戦後に詩を書こうとする自分を含めた詩人たちの内面に突きつけたのだと私は受け止めている。

田中さんは、戦前に本郷にあった女子高等学園で、大正天皇の従妹であり「白蓮事件」で有名な柳原白蓮から短歌を学ぶ機会があったそうだ。また西条八十や大島博光が編集に関わっていた詩誌「蝋人形」

にも詩を投稿していて詩の影響も受けていた。空襲の本格化する前に女学校生活の中でも、田中さんは詩や短歌を書き、哲学の授業など興味深い講座を受けていた利発な女学生だったのだろう。田中さんの結婚前の名前は榊原作子で、実家は茨城県潮来にあり、先祖は水戸藩の武士で漢学者の家系であり、郷土の行政にもかかわっていて、災害時にも活躍をされたそうだ。また、銚子の廻船問屋で親族には漢学者もいた祖母は、短歌を作っていたといい、田中さんにとって短歌を書き始めたことは、祖母や柳原白蓮たちを想起し、やり残していたことを果たす気持ちがあったのだろう。

2

歌集『小庭（さにわ）の四季』は、一月（睦月）から十二月（師走）までの二五八首が収録されている。毎月の季節の移り変わりと小庭（さにわ）の植物に訪れてくる生きものたちの姿を通して、自然の持っている力を田中さんが日々確認し、生きていく力に変換させる力強さを感じさせてくれる。わたしのところにも時々届く短歌雑誌や歌集の多くは、三十一文字を一行で書かれてある。しかし田中さんの短歌は、本人の原稿のように五七五／七七と二行になっている。また二行目は三字目から始まっていて、韻律を受け止めやすくとても読みやすく感じた。一月（睦月）二十首の冒頭は、次の短歌から始まっている。

一年に一度なれども年賀状
　便りうれしき友の筆跡

この短歌を読むと、友の筆跡を辿り友の健康や活躍を願う田中さんの感受性や人生観がよく分かる。私たちは葉書や手紙の内容に目を奪われがちだが、田中さんは手書きの筆跡を楽しむことを伝えてくれている。

りんご一つ裸木に挿し小鳥待つ
　ちいさき生命来るをたのしむ

きっと冬には野鳥の食べ物が少なくなり飢えていることを田中さんは知っている。りんご一つをまるごと挿して飢えを満たし、小鳥の命を慈しんでいる。と同時に田中さんは「ちいさな生命」からエネルギーをもらうようにその光景を心から楽しんでいる。りんご一つの縁を感じているのだろう。

二月（如月）二十二首では、春直前の冬を耐えてきた命の姿を描いている短歌が多く、その健気な命を慈しんでいる。また春を待てずに逝った友を偲ぶ短歌も心に沁みる。

緑なす雑草抜けば根の長く
たくましきかな生命あるもの

梅の花香に送られて逝きし友
空逝く雲を見詰むる我は

三月（弥生）十九首では、梅の花や木々の芽吹きなどを見て、体の寒さも解けていくような温かさを感じさせ、友からも春の息吹きを伝える品や手紙などが届き春を実感させてくれる。

ふるさとの友の好意の宅急便
春の白魚水くきのあと

通りすぎまた振り返る垣の梅
香りに酔いて深呼吸せり

「水くきのあと」とは筆跡の後を意味しているのだが、麗しい筆文字によって故郷の友が冬を乗り切って春を伝えるために白魚を送ってきた喜びが率直に伝わってくる。また梅の香に誘われて梅の周りを立ち去りがたい思いをユーモアも感じさせて記している。

四月（卯月）二十二首では、草木から春の到来を喜ぶ短歌だけでなく、

東日本大震災で被災した人びとへのいたわりも伝えている。

気温零下雪降る夜を被災せし
人は送るか夜具もなきまま

大津波瞬時にいのち奪われし
人の無念は推し測り得ず

田中さんの被災者たちへの深いいたわりの心が伝わってくる短歌だ。家や家族や友人や故郷を無くしてしまった人びとが、夜具も無く過ごしている痛ましい夜の寒さが感じられて、大津波が引き起こした悲劇を甦らせてくれている。

五月（皐月）二十二首では、春の終わりから梅雨に向かう移ろいが描かれているが、人生や永遠の命を問う短歌も多い。

楠の木の古葉は夜に降りつもる
明くればすがしさみどりの空

王墓の豆蒔かれつづけてむらさきの
莢もつ豆の生命永遠（いのちとこしえ）

田中さんは常緑樹の楠が日々下葉を落としながら、命を新たにしていく様を人間が日々細胞を新たに再生させていくことと重ねているように思われる。またツタンカーメン王墓から出てきた三千年前の豆が芽吹いたことから「生命永遠（いのちとこしえ）」の力を短歌に宿そうとしている。

六月（水無月）十七首では、梅雨の晴れ間に覗く光景や遠くへ去る友への労わりなどが記されている。

朝の雨あがりて光る若楓
芝の庭には陽の射してあり

子供住む北海道へ移るのと
　気弱に友はわれに語りぬ

田中さんの短歌は客観的な映像や友の語る近況をただ叙景することに徹しながら、その事実を伝えることからはみ出て来て、何とも言えない抒情がこぼれ出てくる。きっと命を讃えることによって読むものに儚い命や存在の震えのようなものを伝えているのだろう。そして心を許しあう友の心細い心境から、人間の幸せや定めとは何かを考えさせられているのだろう。

3

一月（睦月）から六月（水無月）を読んできて、田中さんの毎月の時間には、季節の色や匂いがあり、時間が深まり瞬間の驚きを湛えながら、生きる喜びと感謝を伝えている思いを感じさせてもらった。その時間には友や親族や被災者の存在を思いやる優しさが溢れている。

七月（文月）から十二月（師走）までを読み進めてみたい。七月（文月）十九首には、菖蒲の咲く頃でもあり、故郷の潮来を振り返り、また大震災の被災者を思いやる短歌もある。

佐原まで舟で行きたるその昔の
　水上の路今は途絶えて

七月の暦めくりて手を止めぬ
　被災せし人如何に過すや
（三月十一日より震災四ヶ月過）

田中さんは潮来から佐原の女学校に舟で通っていたという。当時の菖蒲の咲くのどかな風景を思い出しながら現代の慌しい暮らしと対比させている。また東日本大震災の被災者たちの今も続く苦悩を決して忘れてはいけないという思いを新たにしてくれる。

八月（葉月）二十六首では、真夏の熱気を回想する魅力的な短歌が多いが、異常気象を記した短歌に季節感が損われてくる恐れを直観している。

雲低く梅雨空のまま立秋に
入りてさびしく蟬の声聞く

鎮魂の山車は絆に結ばれて
笛や太鼓は天に届けと

（陸前高田ＮＨＫ中継）

昨年の夏は梅雨が長すぎて、夏が来ないのでは思われた。なぜなら蟬の声があまり聞こえてこないので、夏が耳から感じられなかったからだ。その夏不在の感じを田中さんは的確に表現している。天候不順・異常気象に気付くことは、まだ人間の感性が異常になっていないことの証なのかも知れない。

九月（長月）二十八首では、夏が終わり秋へと代わる時の悲哀のようなものが色濃く出ている短歌が多い。また秋彼岸に亡くなった夫と無言の対話をしている短歌や東北の人びとを鎮魂する短歌も味わい深い。

いま在らば話したきことあまた有り
君の心も聞きたきものを

みちのくの夜空彩る音と花
届けよ天の闇の彼方に

田中さんの夫は、家業だけでなく地元の様々な公職もされていて、地域のために尽くされていたという。それゆえゆっくりと話し合う時間も取れなかったようだ。けれどもこのような短歌を作るために田中さんはきっと夫と豊かな対話をし続けているように私には感じられた。

そのような鎮魂の思いは、みちのくの花火を打ち上げる東北の人びとの思いにも重なってくるのだろう。

十月（神無月）十八首では、天候不順もあるが、秋の収穫の恵みに感謝し、秋の美しい草木を褒めたたえる短歌も多い。

香りよき新米の釜開けるとき
白く燦（さん）たり米の粒粒

葉も無くていっせいに咲く彼岸花
炎の先の紅き妖しさ

田中さんの短歌には、日常の暮らしを淡々と歌う傾向と、時に感覚を研ぎ澄ませてイメージを艶やかに膨らませていく傾向が共存しているが、どちらも無理なく自然に歌われているところが特長だろう。新米の耀きも彼岸花の妖しさも人間にとってどちらも大切なものであり、畦道には彼岸花がとてもよく似合っているように田中さんの短歌もそのように存在しているのだ。

十一月（霜月）二十二首では、小さな庭で大きな秋を臨み、冬に備えようとしている。また晩秋を楽しむ人びとも記している。

旅に出るいとまなければ我が庭の
もみじを山と見立て眺むる

冬近し桜葉の散る川の面
菊川橋にはぜを釣る人

田中さんの短歌は、激情的であったり悲壮感が漂よっていたりせず、淡々と情景を詠んでいるだけだ。過剰に感情を込めないから、読者は自由にその情景に入りこんで、自分の感情をその中で想像することができる。もみじ山をどのように眺めるか。はぜを釣る人は何を思って

いるのだろうか。それを読者に任せている短歌なのだ。

十二月（師走）二十三首では、寒気の師走の中で田中さんは、様々な光景から思索的な短歌を溢れるように残している。田中さんの叙景と思索が合体し新しい調べが人生を物語ってくれている。

年老いて話し込む人多くなり
貧しき昭和を豊かと語る

落葉降る散るにはあらず大いなる
天が与えし歳月の雨

寒風に凛と咲きたる山茶花（さざんか）は
明日散る花と思われぬなり

田中さんの短歌は「短歌的抒情」からは遠く、小庭（にわ）の変化を淡々と

記す大らかな叙景短歌であり、また批評性も秘め人生を見通してしまう思索的な短歌とも私には感じられる。その短歌の中では、野草も植木も小鳥たちも昆虫たちも、また心を通わす友人・知人・親族たちとも、無言だが豊かな対話が楽しげに繰り広げられている。この歌集は田中さんの時代の試練を乗り越えていこうとする詩的精神と新たな四季を発見しようとする美意識が生み出したものだ。そんな希望の調べが奏でられている歌集を多くの四季を愛する人びとに読んで欲しいと願っている。